

アルフレッド・パーソンズと彦根天寧寺(2)

金子 孝 吉

前号(1)の目次

はじめに

- . パーソンズと天寧寺との出遣い
- . 天寧寺での自然観察
- . パーソンズが天寧寺で遭遇したササユリ
- . 寺の人々との親しい交流
- . お茂さんによる養蚕
- . 天寧寺との別れ、そして10月の再会

VII. パーソンズが天寧寺で描いた6枚の画

ここでは、パーソンズが天寧寺滞在中に制作し、“Notes in Japan”の中に挿絵として載せている6枚の水彩画作品の図版を以下に示し、それぞれについて若干の解説をおこなうことにする。合わせて、各作品に描かれていた景色が現在どのように変化しているかについても触れることにしたい。

図版下の四角形の囲み線内にある略号 NiJ は、“Notes in Japan”を表し、その後の題名は、同書に挿絵として載せられたときにつけられていたものである。その下の CCW は“Catalogue of a Collection of Water-colour Drawings by Alfred Parsons”（正式な書名は、本論文末尾にある《参考文献》リストの2番目の文献を参照）の略であり、その後にある題名は、パーソンズがイギリス帰国後、1893年7月に、ロンドンのファイン・アート・ソサエティにおいて、日本で制作した絵画の展示会を開催した際に作成・出版した「カタログ」に掲載されていた題名である。

両者を比べると、画の題名が大きく違っているもの、また微妙に変わっているものなどがあり、それらを細かく見るのも、なかなか興味深い。

1



NiJ: MY ROOMS AT TENNENJI 「天寧寺での私の部屋」
CCW: MY ROOMS AT TENNENJI. Near Hikone. May.
「天寧寺での私の部屋，彦根近郊，5月」

パーソンズが天寧寺に移って、最初に描いた作品。“Notes in Japan”には、パーソンズが5月19日の夕方に彦根に着き、初めに楽々亭に投宿したことは書かれているが、その後、いつ天寧寺に移ったかについては記述がない。しかし、CCWの「カタログ」中の画の題名の後に、天寧寺の書院を描いたこの画の制作時期が“May”「5月」と記入されていることから、遅くとも5月末日までにはパーソンズが天寧寺に移動していたことが分かる。CCWの「カタログ」には、その他の、天寧寺で描いた5枚の作品については、いずれも6月という制作時期が記されているので、書院を描いたこの絵が、天寧寺で彼が制作した最初の画

ということになる。

「書院」の縁側に腰掛けている左側の人物が、住職の Sokin（宗欽）氏、右側の、柱の向こう側にいるのが O Shige San（お茂さん）であろう。

庭園の池のほとりには、明色の花をつけている菖蒲が数多く見られ、また、書院左側の手前の庭には松の木やその下の植栽などが描かれているが、今それらの植物はなくなっている¹⁾。ただ、書院の建物、ベランダから庭に降りるための大きめの踏み石、池に架かる石橋などは、現在でもほぼそのままの姿で残っている（下の写真を参照）。



参考写真：現在の天寧寺の書院

1) 書院横の庭は、中根金作氏らの率いる中根庭園研究所（株）によって、昭和49年10月から11月にかけて修理工事が施されている。そのときに、植栽を含めてこの庭の景観はかなり変貌したということである。

2



Nij : BUDDHA AND HIS DISCIPLES, TENNENJI

「仏陀とその弟子たち, 天寧寺」

CCW: WET GODS (NURE BOTOKE) . On the rocks at Tennenji. Early June.

「天寧寺の岩々の上の濡れた神々(濡れ仏), 6月上旬」

十六羅漢石像が並び、岩だらけの斜面に生えている大きめの樹木は松である。パーソンズは、斜面のある裏山が「松林」になっていたと“Notes in Japan”中に記しているが、そのことの一端をこの画からも窺うことができる。

画面左下に描かれているのは満開のツツジである。パーソンズが楽々亭から天寧寺に宿替えするのを決めた最大の動機は、そこに「ツツジの花がたくさん咲いている」ことであつたわけだから、このように勢いよく咲き誇ったツツジの花を天寧寺で実際に眼にすることができたことに、画家はさぞ満足したにちがいない。

明るい色(おそらく薄紅色)のツツジと、緑の苔に覆われた灰色の石仏群を組み合わせたところが、この絵の魅力の一つであろう。

1893年のロンドンのファイン・アート・ソサエティにおける展示会の「カタログ」の序文では、パーソンズはこの画を次のように紹介している 「十六羅漢は、最も高い場所に座している彼らの師である仏陀によって統括され、まるで石のキノコが生え出ているかのように、ツツジの茂みの中から突き出している。ツツジは、庭の背後の岩だらけの斜面を覆うように茂っていた。」²⁾

谷田博幸氏はこの十六羅漢石像の画について、「1893年、ファイン・アート・ソサエティで開催した滞日作品展には102点が出品されたが、同年のロイヤル・アカデミー展には、この天寧寺で制作された作品のみが日本での思い出を代表するかのように出品された³⁾と述べている。日本で最も楽しい時を過ごしたといえる天寧寺で描いた画は、パーソンズにとってやはり特別な作品だったと言ってよいのかもしれない。

現在、十六羅漢石像群の下にはほとんどツツジの茂みはなくなっているが、



左の古写真には、ツツジと思しき茂みが数多く写っている。また、石像の背後には現在、広葉樹や様々な低木が密生しているが、この写真を見ると、昔は確かに松が多かったことが分かる。

参考写真：天寧寺、十六羅漢の石像（撮影年不詳）

2) CCW, p.7.

3) 江竜美子・谷田博幸『100年前に描かれた彦根 イギリス人水彩画家アルフレッド・パーソンズの話』彦根景観フォーラム編集・発行 2007年、52頁。

3



NiJ: THE BAMBOO GROVE, TENNENJI 「竹林, 天寧寺」
CCW: THE BAMBOO GROVE AT TENNENJI.

Lilium Kramerii and wild roses. Early June.

「天寧寺の竹林, ササユリとノイバラ, 6月上旬」

画面右下に咲いているのが、パーソンズが「彼がこれまで見た中で最も美しい花」と記したササユリ (Lilium krameri) の花である。今では深山に入っていないと出遭うことのできないササユリであるが、当時はこのように人家のすぐ近辺でも6月には普通に見かけられる花だった。

ササユリはもともと西日本地域に多く生育する植物である。天寧寺から少し離れたところに位置している犬上郡多賀町では、ササユリは現在「町の花」となっており、ひとむかし前までは、初夏になると町内のあちこちで野生のササユリが可憐な美しい花を咲かせていたといわれている。

ササユリの背後で明るい色の小さな花をたくさんつけている低木は、ノイバラ (wild rose)。6月に白い花を散房状に咲かせる野生のバラで、現在でも天

寧寺周辺でごく普通に見られる蔓植物である。しかし日本のノイバラは、幕末にヨーロッパに導入されて、バラの品種改良に利用され、ヨーロッパにおいて房咲き性や蔓性のバラを誕生させるのに貢献していた。その意味で日本のノイバラは、当時のヨーロッパのバラ愛好家たちからすれば大いに興味をそそられる植物なのである。英語ではノイバラのことを“Japanese rose”と呼ぶこともある。つまり、極東からはるばる運ばれてきた、まさしく「日本的な」花と見なされていたのである。庭園家として植物に通暁しており、また、後に著名なバラ栽培家エレン・アン・ウィルモットのために優れたバラの植物図譜を制作することになるパーソンズにとって、ノイバラは決してありふれた平凡な花ではなく、わざわざ描くに充分値する珍重すべき花であったと思われる。

画面左側の竹林の床に生育しているのは、その葉形（葉先が少し尖っている）



THE HEART-LEAVED LILY

から、おそらくはウバユリであると推測される。このときウバユリはまだ花をつけていなかったが、それが花咲く姿をパーソンズは日本滞在中にスケッチしており、“Notes in Japan”中にその画が“THE HEART-LEAVED LILY”として載っている（左図）。ウバユリは日本では特に好まれる花ではないが、イギリスには自生しておらず、その葉形のユニークさ、またこれもユリ科の仲間であるということで、パーソンズにとってはやはり注目すべき植物だったのではないかと推測される。

もともとは東南アジアの熱帯地方の産である「竹」(Bamboo)、また日本特産の「ササユリ」、さらに「ノイバラ」や「ウバユリ」も合わせて、イギリスでは本来見ることができない東洋的な植物群に、パーソンズは天寧寺においてごく身近なところで遭うことができた。これら四つの植物の取り合わせは日本人には殊更珍しいものではないが、遠くイギリスから訪ねてきた植物通の画家の眼には、とても新鮮な植生に映ったのではないかと想像される。

4



NiJ: HIKONE AND LAKE BIWA, FROM THE HILLS BEHIND TENNENJI.

「天寧寺の裏山から眺めた彦根と琵琶湖」

CCW: WILD AZALEA ON THE HILLS ABOVE HIKONE.

Lake Biwa in the distance. Early June.

「彦根を見下ろす山の上に咲く野生のツツジ，琵琶湖遠望，6月上旬」

画面左側の小さな山が城山で，右側の大きな山が佐和山。二つの山のあいだに松原内湖が広がり，城山の前には彦根の町並みが見えている。琵琶湖対岸の湖西の山々の霞むシルエットも，遠方に望まれる。

手前に描かれている植物は美しく花を咲かせている野生のツツジ（おそらくモチツツジ）であるが，その他に松の幼木も見られる。現在，天寧寺の裏山（里根山）には背の高い広葉樹や竹，低木など，様々な植物が雑然と隙間なく生い茂っているが，パーソンズがやって来た明治25年には，今のように木々が立て込んでいなかったことが，この画を見ると実によく分かる。

天寧寺の裏山は，明治中期から大正を経て昭和の前半頃までは，寺などに炊事用・暖房用などの薪や柴，落松葉を供給する里山として，松とツツジが優占種となっている景観⁴⁾をずっと保ち続けてきたと推測される。しかし昭和30年

代に入って、エネルギーを専らガスや石油などに頼る「燃料革命」が起こると、日本のほとんどの里山がそうであったように、この寺の裏山も薪や枯枝・落葉などの供給地としての役割を失い、人の手が次第に入らなくなっていった。松は元来、陽のよく当たる、貧栄養の土地に適した樹木である。それなのに、燃料革命後、松林からの定期的な燃料採取が行われなくなり、落ち葉が堆積し始めて土壌が段々富栄養化していき、それとともに他種の高木、落葉広葉樹や照葉樹が侵入してきて大きく成長し、ついには松に十分な日光が当たらなくなった。その結果、松の木の多くは寺の裏山から駆逐されてしまったのである。

さらに追い討ちをかけたのが、昭和末期におけるマツクイムシの発生である。その頃、天寧寺一帯の松がその害虫に襲われて枯れ出し、それを機に寺周辺になおも残っていた松の多くが強制的に伐採されてしまったということである。

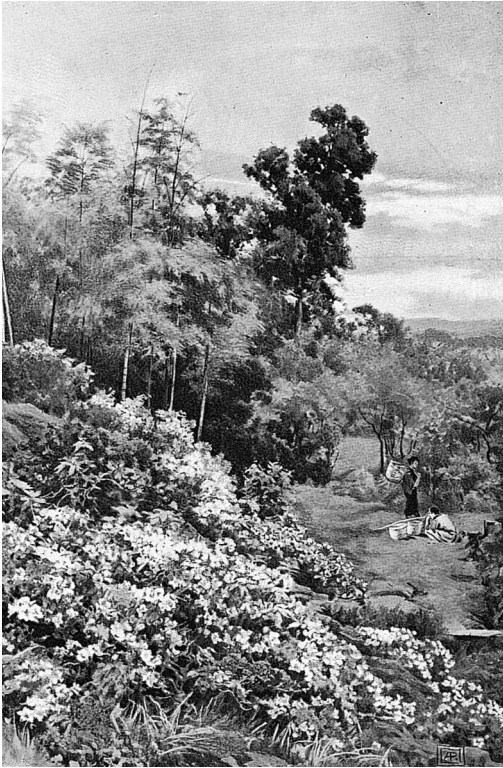
さて、ツツジも、松と同様に強い日光を好み、しかも痩せた土地に生える植物である。だが、寺の裏山の松林が燃料供給地として利用されるのを止め、そこに広葉樹が大きく育って、林床に十分な光が届かなくなり、土壌が肥えてくると、裏山はツツジの生育環境としては適さなくなってしまったのである。

明治25年当時、パーソンズの画が示しているように、松とツツジくらいしか生えていない大変に明るく見通しのよい場所だった天寧寺の裏山が、現在、雑多な広葉樹が密生・繁茂する山に変貌してしまっているのは、以上のような理由による。

ともあれ、今を遡る115年ほど前、視界を妨げる高木がほとんどなかった裏山の頂きから眺望した琵琶湖側の広遠な景色は、実際、パーソンズを感嘆させるほど素晴らしかったと思われる。

4) 有岡利幸氏は「中国・近畿地方の里山の松林は、昭和30年(1955)あたりまでは別名ツツジ山といえるほど、松とツツジが生育していた。モチツツジ……ヤマツツジ……などの野生ツツジである。……ツツジは松林のような明るい林の下で生育する低木で、照葉樹林のような陽光の入らない林の下では生育できない。また、種子はきわめて小さく、松林に生育するスギゴケの中で発芽し、それ以外では降雨のときに流れてしまう」と述べている(『里山』法政大学出版局 2004年、193頁)。また『滋賀の植生と植物』(小林圭介編著、1997年)では、天寧寺近辺の植生はアカマツ モチツツジ群集に分類されている。里山の松とツツジの組み合わせというのは、昔は近畿ではよく見られる風景だったのである。

5



NiJ: AZALEAS
ON THE ROCKS,
TENNENJI.

「岩々の上に咲く
ツツジ，天寧寺」

CCW: AZALEAS
ON THE ROCKS
AT TENNENJI.

June.

「天寧寺の岩々
の上に咲くツツジ，
6月」

天寧寺のツツジを描いた3枚目の作品。この画は、パーソンズが日本で制作した数多くの水彩画中でも、明治中期以降、三宅克己、丸山晚霞、石井柏亭、大下藤次郎を初めとする日本の水彩画家たちに、とりわけ大きな影響を与えた作品の一つである。

この作品は、まずパーソンズ来日中の1892年11月下旬に東京で催された彼の滞日水彩画展で展示され、その後、横浜居住のF・S・ジェームズ氏の自宅の応接室に飾られていたこともあった。さらには1900年春の明治美術会最後の展覧会にも参考作品として出品された⁵⁾。こうした機会のいずれかのときにこの

5) 谷田博幸「交差する両洋の眼差し アルフレッド・パーソンズと明治の水彩画」(川ノ

画を見た日本人水彩画家たちは、それぞれが強い衝撃あるいは刺激を受けた。彼らは後に、そのときの体験を回想しているが、以下、それを引用していくことにしよう。

- ・三宅克己：「明治二十四年……の翌年頃と思ふが、或日原田先生⁶⁾はあわたゞしく塾に帰り、上野の美術学校に非常に上手な英国人の水彩画が陳列されてゐるから、早く行つて観ると云はれるのである。……陳列されたる水彩画は、英国人アルフレッド・パーソンズ氏の作であつた。この画家は重に花を専門に描き、ロイヤル・アカデミイの会員で、英国でも名高い画家であるが、その年の春から秋まで、日本各地を旅行し、何れも花を主題とした写生画が多かつた。その写実の巧妙なことは、未だ會て見たことも無い程の作で、……優秀なものであつた。奈良公園の藤の花、吉野の桜、鎌倉八幡宮前の蓮の花、また彦根天寧寺の躑躅や富士山などの図、何れも人間業とは思われぬ程、技巧の洗練されたものであつた。パーソンズのこの画を見て以来、私の水彩画熱は一層にその度を高め、終に鍾美館の人物の写生画などすつかり興味を失ひ、……ひたすら水彩画の写生のみに熱中することゝとなつた。」(『思ひ出つるまゝ』光人社、1938年、69 70頁)
- ・丸山晚霞：「それは躑躅の咲けるものを主題として描いたもの……で、色彩麗はしく殆ど純写実的に見えるものをその通りに写生したものである。躑躅の細い枝叢の中にある蜘蛛の巣まで描かれてあつた。……今時斯ういふ絵があつたら甘いもんだといふて一概に貶さるゝであらふが、其頃西洋画と言へば暗い燻んだものゝやうに思つて居つたときこの鮮明な細かい純写実の画を見たのであるから驚かずにはゐられなかつたのである。日本の水彩画はパーソンズの感化も大いにあるのである。」(「水彩画の今昔」、『みづゑ』135号、1916年5月、41頁)
- ・石井柏亭：「……色彩が濃厚で華麗な精密な画であつた。点景人物などは感心しなかつたが、躑躅の花に蜘蛛の巣がかゝつて居る処まで書きぬいた細個條描写には驚いたのである。」(『我が水彩』中央美術社、1913年、37頁)
- ・同：「日本に來遊した英国画家アルフレッド・パーソンズの画が横浜の或処に置かれて居る。それを態々見に行くなどのことがあつた。或庭に躑躅花が綺麗に咲いて居る、

6) 本皓嗣・松村昌家編『ヴィクトリア朝英国と東アジア』思文閣出版、2006年、所収)、88頁以下及び111頁の注(30)を参照。

6) 洋画家原田直次郎(1863 1899)。明治17年からミュンヘン留学。帰国後に本郷の自宅で画塾「鍾美館」を開き、三宅克己や和田英作らに洋画を教えた。

其葉のところどころにかけられた蜘蛛の巣まで精密に写してあることが我々を感心させたものである。」(「日本の水絵」、『みづゑ』308号、1930年10月、573頁)

また、丸山晚霞、石井柏亭、大下藤次郎らとともに太平洋画会で活躍した中村不折(1866-1943)は、当時を振り返り、次のように述懐している。

東海道を写生しながら上つて来て東京の何処か展覧会を開いた、其の作品を見ると孰れも百合とかつゞじとか花を主題にして描いた風景画許りなので其頃から花や樹木を多く描くことが流行し出した。それと共にパーソン〔ズ〕の画風の非常に綿密なのを見て水彩画は此んなに細微なものかといふのでそれから追々と手の込んだものを描く様になつたのである。(「不同舎に居た頃」、『みづゑ』135号、1916年5月、26頁)

このように、天寧寺の岩の上に華麗に咲いていたツツジを、「其葉のところどころにかけられた蜘蛛の巣まで精密に写してある」こと、すなわちパーソンズの水彩画の徹底的な「写実」性、その描写の「細微」・「綿密」・「巧妙」さ、「人間業とは思われぬ程」の「技巧の洗練」それらが、当時優秀な指導者を希求していた日本の若き水彩画家たちに及ぼした影響は甚大であった。日本の水彩画の発展・隆盛に決定的ともいえる役割を果たしたこの作品が、ほかならぬ彦根天寧寺が舞台となって描かれていることは、彦根の人々にもっと知られてよいことだろう。

6



Nij: SUNSET OVER LAKE BIWA, FROM TENNENJI.

「天寧寺から眺めた琵琶湖の夕景」

CCW: SUNSET FROM TENNENJI. Looking over Lake Biwa. June.⁷⁾

「天寧寺から眺めた夕景，琵琶湖を望む。6月」

右に佐和山，左に松原内湖，遠くに琵琶湖西岸の霞む山並みが描かれている。二つある灯籠は，現在でも同じ場所に残っている。ただし，現在，両灯籠の後ろには行者堂が建っており（明治末頃以降の建立だとされる），また灯籠の左横には数本の樹木が大きく育っているので，パーソンズがこの画を描く際に座っていたと推測される，灯籠の斜め前の位置からは，今では琵琶湖方向を広く眺め渡すことはできなくなっている。そして，「結露」と彫られた石製の水槽は，現在は井伊直弼の供養塔の前へ移動している。

7) CCWの展示リストには，“A DEW CISTERN AND LANTERNS AT TENNENJI, NEAR HIKONE. June.” 「彦根近郊，天寧寺にある 結露 と彫られた水槽と二基の灯籠，6月」という題名がつけられた作品も載っており（CCW, p.19），この6の画は，そちらの題名と関係している可能性もある。

おわりに

明治25年来日し、日本各地を写生旅行しながら、当時の日本の自然、人々の生活などについて詳細に記録したパーソンズの“Notes in Japan”は、これまで日本において十分に注目されてきたとは言い難い。しかし、天寧寺に関してだけ見ても、百年以上前の同寺の建物や植生、そこに住む人々の暮らしの様子などが、明澄な文章と精妙な絵画によって実に生き生きと記述・再現されていて、私たちは当時の様子をいわば手に取るように具体的に知ることができる。自然と人間に対して優れた感性と観察力を備えていた芸術家によって、明治の一時期の彦根の姿が鮮やかに記録されている点で、パーソンズの“Notes in Japan”は、彦根の歴史を知るうえで貴重な文献となっているのである。

《参考文献》

- Alfred Parsons, Notes in Japan, New York: Harper & Brothers Publishers, 1896 [略号: NiJ]
Catalogue of a Collection of Water-colour Drawings by Alfred Parsons, R.I., Illustrating Landscapes & Flowers in Japan, with a Prefatory Note by the Artist, exhibited at the Fine Art Society's, July 1893 [略号: CCW]
「日本に於ける初夏」(英人アルフレッド、パーソンズ記)『米国ハーパース月報』(和訳者不詳)(雑誌『太陽』創刊号〔明治28年1月号〕博文館、所収)
アルフレッド・パーソンズ(鵜澤四丁訳)「日本の初夏(上)」、『みづゑ』37号、1908年(明治41年)5月)、「日本の初夏(中)」、『みづゑ』38号、1908年6月)、「日本の初夏(下)」、『みづゑ』39号、1908年7月)
島戸繁「水彩画家 アルフレッド パーソンの事(ALFRED PARSONS 1847 1920)」、『滋賀県立短期大学雑誌 B』第4号、1953年3月
谷田博幸「交差する両洋の眼差し アルフレッド・パーソンズと明治の水彩画」(川本皓嗣・松村昌家編『ヴィクトリア朝英国と東アジア』思文閣出版、2006年、所収)
谷田博幸「イギリス人画家パーソンズと彦根」(『Duet 94号』2007年3/4月、サンライズ出版)
江竜美子・谷田博幸『100年前に描かれた彦根 イギリス人水彩画家アルフレッド・パーソンズの話』彦根景観フォーラム編集・発行、2007年

- 西田正憲「明治後期の風景画家アルフレッド・パーソンズと大下藤次郎による自然景の発見」(『ランドスケープ研究』日本造園学会誌66巻第5号, 2003年)
- 青木茂『自然をうつす 東の山水画・西の風景画・水彩画』(岩波 近代日本の美術8) 岩波書店, 1996年
- 自然の美・生活の美展実行委員会『自然の美・生活の美 ジョン・ラスキンと近代日本展』1997年
- 『もうひとつの明治美術 明治美術会から太平洋画会へ』展図録, 2003年
- 『みづゑのあけぼの 三宅克己を中心として』徳島県立近代美術館編, 1991年
- 三宅克己『思ひ出つるまゝ 三宅克己自傳』光大社, 1938年
- 石井柏亭『我が水彩』中央美術社, 1913年
- 三輪英夫編著『日本の水彩画14 三宅克己』第一法規出版, 1989年
- 原田光編著『日本の水彩画1 大下藤次郎』第一法規出版, 1989年
- Basil Hall Chamberlain & W.B. Mason, Handbook for Travellers in Japan, Third Edition, London: John Murray, 1891.
- Herbert George Ponting, In Lotus-Land Japan, London: Macmillan and Co., Ltd., 1910 (ハーバート・G・ボンティング『英国人写真家の見た明治日本』長岡祥三訳, 講談社, 2005年)
- 中村直勝編『彦根市史 下冊』彦根市, 1964年
- 『新修 彦根市史 第8巻 史料編 近代』彦根市, 2003年
- 『彦根の近世社寺建築 近世社寺建築緊急調査報告書』彦根市教育委員会, 1983年
- 高木文恵「井伊家歴代の肖像彫刻 藩主直中の造像活動 清涼寺護国殿と天寧寺観徳殿」(『彦根城博物館 研究紀要』第15号, 2004年)
- 『滋賀の美 庭』京都新聞社, 1985年
- 春山行夫『花の文化史 花の歴史をつくった人々』講談社, 1980年
- 白幡洋三郎『プラントハンター』講談社, 2005年
- 『日本農書全集第35巻 養蚕秘録 蚕飼絹篩大成 蚕当計秘訣』農山漁村文化協会, 1981年
- 菅原久夫『日本の野草「夏」』小学館, 1990年
- 小林圭介編著『滋賀の植生と植物』サンライズ印刷(株), 1997年
- 村長昭義監修『鈴鹿の山で見られる花』鈴鹿の山 花散策会編, 2004年
- 室井緯『竹』(「ものと人間の文化史」10) 法政大学出版局, 1973年
- 四手井綱英『森林』(「ものと人間の文化史」53) 法政大学出版局, 1985年
- 有岡利幸『里山』(「ものと人間の文化史」118) 法政大学出版局, 2004年
- 足田輝一『雑木林の博物誌』新潮社, 1977年
- 鈴木三男『日本人と木の文化』八坂書房, 2002年

有岡利幸『松 日本の心と風景』人文書院，1994年

宮本常一著作集43『自然と日本人』未来社，2003年

謝辞：本稿(1)と(2)の執筆にあたり，谷田博幸氏，山路信乗氏，山路博子氏，
久保田昌弥氏，高木久子氏，島戸陽氏，小林隆氏，出雲孝子氏，堀井
靖枝氏，江竜美子氏を初めとして，たくさんの方々から多大なるご協
力を賜りました。この場を借りて，心より御礼申し上げます。